

Title	家永三郎著 数奇なる思想家の生涯：田岡嶺雲の人と思想
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.1 (1956. 1) ,p.72(72)- 76(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19560101-0072
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560101-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

問題を營業狀況に限定して考察してみれば、損害保險事業が健全な經營を維持・推進するためには、「(一)適正な損害率を維持すること。(二)經營率を低め、資産収益をもつて人件費、物件費をできるかぎりまかなうこと。(三)現行損害保險制度の質的な進歩改良を圖ること。(四)各社がそれぞれならぬかの營業保險種目に特殊性を見出すこと。」(一一七頁)と明確に指摘し、さらに損害保險企業の靜態分析の最終的な結論として、「(一)運用資産の絶對額の増加と運用方法の適正化を圖る必要がある。(二)責任準備金の積立ないし諸準備金の増加等によつて資本の蓄積を圖る必要がある。」(二七六頁)、動態分析の最終的結論として、「(一)純利益構成の適正化するわち營業外利益を擴大する。(二)そのための必要條件の一つとして利息、配當金収入を擴大することの必要性が指摘される。」(二七六頁)とする本書は、正確な保險學の知識と廣範な經營理論の活用により、數多の資料を基礎とする、損害保險業界の實際・實務の經驗に則した學理研究の成果の結實せるものであつて、數少ないわが國の損害保險經營論の書物と伍して、その價值は極めて高く評價されるであらう。(A5版、二七六頁、付表三八頁、表索引四頁、昭和三十年五月一日、保險研究所、五五〇圓) (庭田 範秋)

家 永 三 郎 著

『數奇なる思想家の生涯』

——田岡嶺雲の人と思想——

篇を新聞雜誌の上にのこしたにもかかわらず、歿後はまったく忘れられた文人の域に入つてしまつたのであつた。思想家の運命はかないことかくのごとくであるが、彼は價值のない思想家であつたが故に忘れられたのではなく、反對に彼の價值があまりに高かつたが故に、忘れ去られる條件をつくり出したのであることを看過してはならぬ。なぜならば、彼の代表著作がごとごとく發賣禁止になつたということが、それ自體、彼の筆力のいかに鋭かつたかを物語つてゐるからである」と(五一―六頁)。

それならば田岡嶺雲とは、一體どのような人物であつたらうか。

二

田岡嶺雲は明治三年、自由民權運動の發祥地である土佐藩の士族の三男として生れた。もちろん士族といつても、陪臣にすぎずきわめて身分も低かつたから、生活は苦しかつた。しかし家柄において何の誇るべきものをもたない嶺雲の生家には、従つてまた多くの舊家に見られるような貴族的な氣風というものはなかつたようで、比較的自由的な空氣が存していたのかも知れない。彼は、明治時代にその少年時代をおくつた人の常として、小學、國史略、日本外史、十八史略などによつて、漢學の教養を身につけ、幸にも十一、二歳の頃には英語を學ぶ機會に恵まれ、これによつて彼の眼は外へひろくむけられることとなつた。

明治初年の高知といえ、自由民權運動が嵐のようにわきおこつた土地であつた。われわれがすぐ腦裡にうかべる人々は、たとえば植木枝盛であり、板垣退助であり、更にのちに無政府主義者となつ

著者は、この書の冒頭に、「田岡嶺雲は、忘れられた思想家の一人である」と書いて居られるが、まことに嶺雲の名前は、今日のわれわれにはすつかり忘れられて、知る人も少い。明治の時代には著名な評論家として、有能なジャーナリストとして、或はまた思想家として、はなばなしい活躍をした嶺雲は、わずか五十年しかたつていない今日、何故に忘れられてしまつたのだろうか。幸徳秋水や堺利彦と親しく、大町桂月や泉鏡花と交わり、夏目漱石にも知られ、これらの人々とともに、新聞や雜誌に論陣をはつた嶺雲の名は、何故にかくも埋もれてしまつたのだろうか。この理由について、著者はつぎのように云う。「それは、彼の評論が、梅溪のいわゆる『直筆忌憚するところがなく』、またあまりに『霸氣、血氣、客氣が一時に流露して』いたため、時の政治權力者の憎しみを買い、その主要な著書がごとごとく發賣禁止の處分に附せられたためである。いつたい新聞とか雜誌とかに文章を書いていると、多數の世人に讀んでもらえる可能性が多いのであるが、新聞雜誌はおおむねその場かぎりで讀み捨てられて、後に保存されることがほとんどないため、いくら名論卓説でも、つぎの時代になると、誰ももう知らないという結果になつてしまふ。これに反し、單行本は、新聞雜誌より發行部數のすつと少いのが普通であるが、それほど價值の高くないものでも、新聞雜誌よりは保存率はすつと高く、従つてつぎの時代以後になつてからも、割合に讀み直される機會に恵まれるものである。不幸にして代表的單行著作をことごとく禁止された嶺雲は、多くの名

た幸徳秋水であらう。わが田岡嶺雲は、このような自由民權運動の闘士たちが、專制主義、絶對主義の明治政府に對して、生命を賭して闘つてゐる姿を眼のあたり見て感激し、彼等の演説會にひそかに出入して、幼い胸をときめかす多感の少年であつた。政治に對する鋭い感覺、社會評論家としてのすぐれた感受性、有能なジャーナリストになつてはならぬ正義感などは、嶺雲が生れながらにしてもつていたものではあるが、その天稟はすでに、この當時からあらわれはじめていたと思われる。この著書の題名の示すように、數奇な思想家であつた嶺雲は、多くの紆餘曲折をへて、明治二十七年、東京帝國大學の選科を卒業したが、それより數年前、まだ彼が水産傳習所の學生であつた頃、偉大なキリスト者内村鑑三の講義をきく機會をえた。そして、魚類解剖の講義よりも、「偽善者たるな」という内村の一語を、終生肝に銘じて忘れなかつたといわれる(二五頁)。まことに彼は、生涯を通じて偽君子ではなかつた。俗物ではなかつた。「試みに明治の思想家で、批判的反響的な活動をした人たちを拾つて、その學歴を調べてみると、帝國大學の卒業生などはかえつて探すのに骨の折れるくらいで、たいていは、私學、又は官學でも傍系の學校の卒業生か、そうでなければろくすつば學校らしい學校を出ていない人たちがばかりであつた。二葉亭四迷は帝國大學の卒業生であるか？内田魯庵は帝大を出ているか？北村透谷は？石川啄木は？片山潜は？安部磯雄は？内村鑑三は？山路愛山は？木下尚江は？幸徳秋水は？横山源之助は？こう數えだててくると、文壇に論壇に革新的なしごとをして來た人物が、申し合わせたように帝國大學以外で育つて來た人たちがばかりではないか。帝國大學は半封建

書評及び紹介

的權力の忠實な官僚・教師・技師の養成所であつて、野黨魂を養うところではなかつたのである(二七頁)。このように、いわば野黨的精神にもえ、權力に對して批判的であつた嶺雲は、どのような思想を抱いて、どのように数奇な生涯をおくつたであらうか。

三

田岡嶺雲が少年時代をおくつた明治の初年は、さきにも述べたように、自由民権運動がはうはいとしてわき上つていた時代であつた。そして國內におけるこのような絶對政府への抵抗運動というものは、その側面として健全な民族主義的傾向をもつていた。專制政治に對するはげしい憤りは、勢い、歐米資本主義諸國の壓迫と侵略に對して、民衆の迷夢をよびさまそうとする運動と結びつく。杉田定一の「經世新論」などが最も愛讀された所以である。「明治前半期の自由民権運動は、大正昭和初期の改良運動革命運動とちがひ、濃厚なナン・ナリズムの色彩にいろどられていた。民権家には、よい意味でも悪い意味でも、「國士」のおもかげがあつた。後年の嶺雲にもはつきりとおもかげがあらわれているが、それは政治的霧圍氣と果して無關係であつたらうか(二二頁)。

明治二十七年に文科を出た嶺雲は、文士、教師或はまた新聞記者となることができたが、性來、反抗心にとみ野心にみちていた彼には小説家はむかなかつた。その無遠慮にして峻烈な批評は、萬朝報の記者としての生活すら不可能にしたのであつて、その間、岡山縣美作の津山中學校の教師の生活もあつたが、ある女性との戀愛事件のために、それもやめた。やがて彼は、「いばらき」や「中國民

報」などの地方新聞の記者をしたり、或は文壇に立とうとして、明治三十八年には雑誌「天鼓」をはじめたが、そのはげしい論調のために禁止處分になつた。この當時から、彼の評論家としての才能は益々光を放つてきたらしい。「彼の社會を見る眼は、いくたの辛酸を経てますます深くなり、鋭くなつた。『青年文』時代の論集がいずれも無事刊行されているのに、『天鼓』時代の文集がつきつき發賣禁止の處分をこうむつていゝのは、一つには評論の對象が、もつぱら社會的な事象に向けられるようになったためであるが、同時にその筆鋒がますます尖鋭となり、明治政府の治安方針と正面から衝突するにいたつたからである。……『天鼓』時代になると、評論の對象をますます擴大し、あらゆる事象に向い、『八面鋒を揮ふ』武者ぶりは、比類なきものがあつた」(三七—三八頁)。こうして筆禍ははじまつた。

明治二十七、八年の日清戦争後、日本は産業革命を行い、東洋における最初の資本主義國としてその體裁をととのえ、三十年代になると、にわかには労働問題がやかましく叫ばれはじめ、それとともに労働組合運動も活潑となつてきた。だがこれに對し、政府は極端な弾壓政策をもつてのぞみ、三十三年には、いわゆる治安警察法をもつて、労働組合運動や社會主義團體はもとより、言論の自由を壓迫しつゝあつた。明治政府はおのれに批判の言葉をあびせた人々の自由をはく奪したが、嶺雲もその犠牲者の一人であつた。專制的な政治の特徴として、あらゆる言論弾壓と人権じゆうりんは、國家の名において強行せられ、あらゆる國家機關は、これらの自由な思想の持主を根絶するために動員され、いわゆる「デッチ上げ」な事件も

めづらしくなかつた。大逆事件はその典型的な一例である。こうして嶺雲の一切の著書はすべて發禁となり、嶺雲は、「忘れられた思想家」たるべく、運命づけられたのである。

だが、國內におけるはげしい弾壓は、海外に對する侵略政策と決して無縁ではなかつた。いや、前者は實に後者のための準備にすぎないのである。

嶺雲は、家庭的にはきわめて不幸な人であつた。最愛の女性と別れ、愛情のない結婚に苦しんだことは、その責任の一半が彼にあるにせよ、たしかに悲劇であつた。彼が病弱な體軀をひつさげて、三回も中國の土をふんだのは、その大陸への冒險的な野心——當時の自由民権家に見られたアジアの先覺者たる野心——のためであつたらうが、また反面、家庭的な悲劇が、彼の情熱を外へ發散させ、その放浪癖に拍車をかけたとはいえないだらうか。彼は三十三年北清事變の際、九州日報の從軍記者として、直接戰場に赴き、つぶさに戦争の慘禍を體驗した。「苦なるものもより多く、慘なるものもより多し、而かも戦より苦なるもの亦少なからん。我は昨天津に入るの途上に於て、天熱に喘ぎ飢渴に迫り乍らも、猶銃を肩にして進み、終に路傍に倒るるの兵を見、今天津に入て兵燹にかかれる居留地の光景を見て、我は寧ろ非戦を唱うるの人たらんと思えり」(七五頁)とは、彼の偽わらざる心境であつたらう。では、彼は、その後、その言葉のように非戦論者であつたらうか。「このよくな深刻な反戦感情を胸に印しながらも、日露戦争が近づいたとき、彼は親交ある平民社の人たちと意見を異にして、開戦論を唱えたのである」(七六頁)。要するに、嶺雲のアジアの先覺者、東洋を

歐米諸國の桎梏から解放しようとする思想のなかには、やはり日本大陸侵略という危険な方向がひそんでいたのではないだらうか。ここにおいて、嶺雲は、「忘れられた思想家」であるとともに、「矛盾せる思想家」であつたのである。

以上は人間としての田岡嶺雲の素描である。もとより、このような数奇な人物の生涯は、いろいろの人間の苦惱にあふれ、矛盾にみちてはいるが、しかしその矛盾はまた彼の思想そのものなかにもひそんでいた。最後に、家永教授の語るところによつて、彼の思想について考えたいと思う。

嶺雲は社會主義者であつたらうか。幸徳秋水や堺利彦と親交を結んだ彼は、たしかに社會主義的な思想をいだいたであらう。彼が、『社會百面相』なる特異の作品を出して、いわゆる社會小説なるものを書きはじめたのは、現代資本制社會の矛盾を、するどく感していたからであつた(一〇一頁)。文學者として、自然主義の唯物性をしりぞけ、樋口一葉や泉鏡花の作品を推奨した嶺雲は、また現實の社會の矛盾をついた木下尚江を高く評價することを、決して忘れなかつたし、夏目漱石を尊敬した。

彼はみづから非文明の思想によつて、現代文明の弊害を鋭く指摘している點では、當時の社會主義者に劣らなかつた。だが彼は社會主義者であつたらうか。彼は『數奇傳』のなかで、つぎのように説明しているといわれる。「自分の思想は社會主義といふある定まつた信條をもつ社會主義ではない。自分は組織的に社會主義を研究したものではない、もし自分の思想が社會主義的色彩を帯びているとすれば、それは自分が社會主義者であるためではなく、社會主義

というものが、たまたま自分の思想と相觸れた所があるにすぎないのである……もし自分の社會主義というものがあれば、それは貧者にたいする同情、ただこれだけである……」(一二三頁)。すなわち彼によれば、大鹽平八郎も能澤藩山も社會主義者であるというのである。支配階級のための仁政、徳政をすらし、社會主義と考えた嶺雲には、社會主義の本質は把握されていなかった。ここにもまた「矛盾せる思想家」の一面があらわれている。著者はつぎのように云われる。「彼もまた夏目漱石等と同じく明治天皇の計報に哭する明治人であつたのだ。そうでなければ、何をことさら『天慟地哭の悲報』というような文字を使う必要があるであらうか。晩年の彼が筆禍を防ぐために多少細心となつていたということはあつたようにせよ、自らすすんで詔諫の辭を文中に挿入するような人物では断じてない。その點では、彼は日本に革命を起すために天皇を倒すことの急務を力説した幸徳秋水や明治天皇をムツヒトと呼び捨てにした木下尚江とまつたくちがつている」と(一三二—一三三頁)。權力を憎悪し、權力と闘いながらも、權力の根源をつきとめえなかつた彼は、やはり社會主義者ではなかつた。しかしこのことは毫も嶺雲の偉大さをそこなうものではない。彼のあらゆる思想は、今もなおわれわれの胸を強くうつ。專制政治のもとでは、より多くの人々が嶺雲と同じくその言論の自由を奪われて死んでいった。われわれの任務は、それらの人々の思想をより一層發展させることではなければならぬ。

最後に、「忘れられた思想家」嶺雲を、われわれの前に蘇らせてくれた家永教授の學問的な良心に、深い尊敬をおぼえずにはいられない。

い。そしてまた、嶺雲の著書といえは、「明治逆臣傳」しか讀んでいない門外漢の私が、この香り高い著作によつて蕪雜な紹介を試みなければならなかつたことについては、著者および讀者諸子の寛容に待つほかはない。(岩波新書・百圓)一九五五、九、四—

(飯田 鼎)

經濟學關係文献目錄

(昭和三十年八月—十月—その二)

理論・學說史・經濟思想

- *後進諸國の資本形成 ヌルクセ著 土屋六郎譯 B 6 二四一頁 二八〇圓(巖松堂)
- *マルクス經濟學の形成 經濟學說全集7 マルクス著 向坂逸郎譯 A 5 三三六頁 三四〇圓(河出書房)
- *最大限利潤の法則 内田稷吉編 B 6 二八八頁 三〇〇圓(大月書店)
- *スターリン經濟學論文の學習 千家駒著 尾崎庄太郎譯 青木文庫 A 6 二六六頁 一一〇圓(青木書店)
- *社會科學概論 玉城肇著 B 6 一九四頁 二〇〇圓(刀江書院)
- *古典派の批判 末永茂喜編 經濟學說全集4 A 5 三一〇頁 三四〇圓(河出書房)
- *金融資本論 中 ヒルファディング著 岡崎次郎譯 岩波文庫 A 6 一八八頁 八〇圓(岩波書店)

經濟學關係文献目錄

- *ケインズ以後の經濟學 鈴木諒一著 増補版 B 6 一七四頁 二〇〇圓(泉文堂)
 - *厚生經濟學 4 ビグツ著 氣賀健三・千種義人・鈴木諒一・福岡正夫・大熊一郎譯 A 5 二〇六頁 四〇〇圓(東洋經濟新報社)
 - *計量經濟學の確率的接近法 ホーベルモ一著 山田勇譯編 一橋大學經濟研究叢書 A 5 一六〇頁 二五〇圓(岩波書店)
 - *資本論に關する手紙 下 マルクス・エンゲルス著 岡崎次郎譯 A 5 二〇八頁 三〇〇圓(法政大學出版局)
 - *經濟學史 舞出長五郎・横山正彦著 經濟學全集 A 5 二七二頁 七〇〇圓(弘文堂)
 - *經濟學概要 正木一夫・椋原敬三著 A 5 三〇七頁 三八〇圓(關書院)
 - *經濟學教科書講義 1 宮川實著 青木新書 B 40 二二二頁 一〇〇圓(青木書店)
- #### 勞働・社會政策
- *勞働問題の背後にあるもの 岡田完二郎著 B 6 一四二頁 一八〇圓(一橋書房)
 - *勞働問題事典 大友福夫編 青木文庫 A 6 三一四頁 一五〇圓(青木書店)
 - *ソ聯の勞働階級及び勞働政策 上 シュワルツ著 松井七郎譯 A 5 二五一頁 三八〇圓(巖松堂)
 - *ソヴェト勞働組合運動史 下 マルコフ著 山下龍三譯 社會科學選書 B 6 二五二頁 二六〇圓(青木書店)
 - *勞働白書 一九五五年版——勞働經濟の分析——勞働省勞働統計調査部編(勞働法令協會)
 - *勞働生産性の理論と實際 勞働省勞働統計調査部譯編 A 5 二二八頁 二五〇圓(勞働法令協會)
 - *戦後日本の勞働運動 大河内一男著 岩波新書 B 40 二二六頁 一〇〇圓(岩波書店)
 - *イタリヤ勞働組合運動小史 ガンデローロ著 石黒寛・代久二譯 國民文庫 二一七頁 九〇圓(國民文庫社)
 - *アメリカの當面する勞働問題 アメリカ政治經濟研究會譯 青木文庫 A 6 二四〇頁 一〇〇圓(青木書店)
- #### 歴史
- *歴史の遺産 石母田正著 大月新書 B 40 二三一頁 一二〇圓(大月書店)
 - *近世地方史研究入門 地方史研究協議會編 B 6 小 三三四頁 三二〇圓(岩波書店)